

海外散歩

珍虫ハンター としての海外旅行記

その1

珍虫ハンター始動

株式会社 スターラボ
佐藤 勝

私は幼少期から昆虫が大好きで高校卒業後からカブトムシ、クワガタ、コガネ・ハナムグリ、カミキリムシ限定で採集し標本を集めるようになった。日本全国制覇して特に北海道と沖縄及び離島には亜種や珍しい昆虫があるのでその区域を中心に活発に出向くようになった。そして日本の南大東島で新種ヒサマツサイカブト♂の第1発見者として新聞に掲載され、今度は海外で新種を発見したい思いから今日現在でいつの間にか134ヶ国到達している。日本で新種を発見したのは運の良さかまぐれにすぎない。なぜなら、いくら昆虫が大好きでも学者でもなくそのような大学の研究室にも所属した事もなく、単に独学で知識を得ただけで私は素人そのもので一般社員だからだ。だから標本を限定しているのもその種類の国産種なら何となく和名はわかるもののそれ以外の昆虫はあまり詳しくない。外国種に至っては有名なヘラクレスオオカブトといった名の知られている虫や、誰もが1度は聞いた事ありそうなアトラスオオカブトとコーカサスオオカブトは類似していても相違点の説明文を図鑑で読めばパッと見ですぐにわかる。しかし、それ以外の図鑑に載っていない外国種を見付けたとしても何の種類なのかはすぐにはわかるものの和名が全くわからない。日本では大図鑑による全種掲載と独学でコレクションしている個体ならだいたいわかる。東京の都心部や庭にもいるゴマダラカミキリやシロテンハナムグリは誰でも1度位はお目にかかった事があると思うし、都心部に生息して

いなくてもペットショップでカブトムシは見た事のある人は多いはず。前者のカミキリとハナムグリは都会でも生きていける環境に適応していて個体数も多い。後者のカブトムシは樹液の出ている雑木林で見付かるがそもそも養殖が簡単で数が多い。一般的に昆虫界では数多くて簡単に見つけられる虫を普通種と呼んでいる。そしてあまり見かけない虫は希少種、絶滅が危ぶまれている虫を絶滅危惧種と呼んでいる。では珍虫って何なのだろうか？珍しい虫と書くのであまり見かけない虫と捉えてもおかしくはない。

私が新種発見で新聞掲載された当時海外渡航数は49ヶ国だった。これまでは趣味として海外で何でもいから虫が欲しいと旅をしてきたが海外で絶対新種を見付けてやると強い願望が生まれたのは50ヶ国目からだった。実は新聞掲載された年の夏、ヨーロッパ周遊採集旅行の予約をしていたのだがその年の春に新型インフルエンザの影響で中止を余儀なくされてしまった。渡航の許可が下りたのは翌年の晩秋だった。晩秋のヨーロッパでは何も採れないと思っていたが、成虫のまま越冬するヨーロッパオオクワガタ等が朽木から見付かる可能性にかけたのと海外に行けなかった鬱憤がたまっていたので頑張ってみたら予想通りヨーロッパオオクワガタが見付かった。和名がわかったのは図鑑のお陰だったが、これまた成虫越冬するハナムグリ仲間が見付かった。この年以降僅か3年で約30ヶ国到達し、2013年9月の誕生日で

80ヶ国到達した。怒涛の様に渡航したのは海外で新種を発見したいという思いからだ。自身の誕生日で80ヶ国到達の節目であった事や年内の渡航の予定はもうなかったの、誕生日を記念して海外の旅行記を出版しようと決めた。著書のタイトルを何にしようか熟考して思いついたのが「珍虫ハンターの海外旅行記」であった。

これは芸能人の珍獣ハンター・イモトのニックネームを拝借しアレンジしたものであるがもう1つの由来が、その国において採れた虫が例え普通種だとしても海外産の昆虫は和名がわからないので全て珍虫と勝手に決めつけて自称珍虫ハンターとして活動しているからである。例として先に述べたヨーロッパ周遊中に採集したオオクワガタはヨーロッパの広範囲で割と簡単に見付かるので普通種に宛がうが、ハナムグリは日本のシロテンハナムグリに類似していたが、光沢や色違い大きさから一目みてシロテンハナムグリとは別種とわかったが和名がわからず珍虫扱いにしている。そんなこんなで「珍虫ハンターの海外旅行記」を出版してから、有り難い事に読者からの様々な反響や批評が聞けて、103ヶ国迄掲載した「続&改 珍虫ハンターの海外旅行記」も出版する事が出来た。私はカブトムシ、クワガタ、コガネムシ・ハナムグリ、カミキリの仲間限定で標本を集めている事は先に述べたが、中にはコガネムシの仲間でもクワガタのような鋏を持つクワガタコガネやハナムグリの仲間でもカブトムシの様な角を持つカブトハナムグリといった珍しい昆虫がいる。日本にはニセクワガタカミキリというカミキリムシがいるが個体数は少ない。このような和名が合体しているタイプは少ないのでこれが本当の珍虫と呼ぶべきだろう。

なぜ、多国に渡航するのか？

私は昆虫採集目的の為に全国制覇をあっという間に成し遂げた。沖縄や北海道は多くの固有種がいて、東北限定、関東以西、四国限定、九州限定といったような固有種もそこそこ存在する。その固有種が採れる迄何度も足を運んだりはしたが、結局雨天やライ



珍虫コレクション クワガタコガネ ベトナム産(左) ニセクワガタカミキリ ベルギー産(中) カブトハナムグリ インドネシア産(右)

バル出現で空振りしたりはしたが、その地域に足を運ぶという事が旅行となり、いつの間にか趣味が旅行となっていた。大金を使って現地に赴き、採れなかった時の屈辱的な味わいを癒すのは宿泊地の温泉に浸かったり郷土料理を食べ、快適な睡眠で疲労回復とストレス解消も出来るのが旅行の楽しみになっていった。近年では自分へのお土産購入として道の駅巡りもはまっている。また、道の駅では夜外灯に飛来する虫を捕まえるのに、宿をとらずにそのまま車中で泊まる事も出来るので好都合な場所でもある。海外の場合、国内のように日帰りや1泊で帰国するのは困難であり、お隣の韓国は1泊でも何度も足を運び大抵同じ虫しか採れない。中国は国土が広い分、様々な都市に出向いたが日本にもいる種だったりと同じ国ではなかなか面白みが湧かず、色々な国へ行き色々な虫を採取して新種を見付けるのを目標としている。誰もが知っているようなカブトやクワガタが採れるにこした事はないが、日本人が行かないような国へ行き、例え新種ではなくても誰もがコレクションとして持っていない虫を採って標本として飾りたいという熱い思いが信念となっている。世界の国数は200弱あるが治安の悪い国があるので世界制覇は無理だとしても可能な限り沢山の国々へ渡航出来たらパスポートのスタンプ等が記念にもなるし、それこそ珍獣ハンターの異名を持つイモトさんに対抗出来るのではないかと勝手に思っている。私は一般社員な

ので長期の休暇は中々取れず殆どが弾丸個人旅行で計画を立てている。弾丸旅行の場合、大抵が都市部の首都滞在で虫の少ないエリアになってしまうのだが、現地に着いたら必ず行う事は、昆虫採集、土産購入、レストラン探しでご当地物を食べる事である。限られた短い時間の中で全てをこなすのはかなり大変ではあるが、雨でも頑張ってお虫を探し、お休みをもらった分、仕事仲間への土産購入は必ずしなければ気が済まない。虫が採れなかったとしても最近では初めての国へ入国出来ただけで満足感を覚えるようになった。そして数える事、134ヶ国到達に至っている。因みに出張による渡航は1度もなく全てプライベートで訪れている。イモトさんの場合はスタッフやスポンサーが何人も付いているが、私は個人単独旅行ばかりで全て自力であらゆる事を手配している。何だか珍虫ハンターというよりも珍国ビジターと言った方が分かり易いかも知れない。

珍獣イーター

2019年の夏休み、私はザンベジ川付近で珍虫をハントしていた。ザンベジ川はザンビア、ボツワナ、ジンバブエ、ナミビアの4ヶ国の国境があり、ザンビアとジンバブエの国境は世界遺産のビクトリアフォールズがある。初日私はザンビアのロッジに宿泊し、白昼ロッジ前で野生の象が見られた。夜に珍虫を探しに外灯下をうろうろしているとたまにカバも陸にあがってくるので気をつけると言われたが会おう事はなかった。イボイノシシやバブーンは街中のアスファルト道でも普通に見られた。翌日、今度はボツワナのカサネへ渡し舟で渡った。カサネでは珍虫の採れそうな場所はなく、ホテルの明かりに翔んできた複数のカミキリだけであった。カサネの殆どのホテルがチョベ国立公園でのゲームサファリ（ジープに乗って野生動物を観察する事）のツアーを遂行しているので参加してみた。するといきなりあいつがやってきた。

「ほんとにほんとにほんとにほんとにライオンだ。近すぎちゃってどうしよう。可愛くってどう



世界遺産ビクトリアフォールズ



象の群衆



現れたライオン♂

しようチョベ・サファリパーク♪」そのまま進んで行くと象の親子連れの群れが食事を摂っている姿が見られた。その後はライオネス（英語で♀ライオン）が2頭いて、近くに肉を抉られた仔象の死体があっ

た。ひょっとしてライオネス飛鳥と長与千種のクラッシュギヤルズが極悪同盟（極悪動物）をやっつけたのか？まあ、象は極悪ではないですが・・・その後は聞いた事のない名前の動物やキリン、マンゲース、シマウマ、ガゼル、インパラ、ホロホロ鳥等沢山の動物が見られ、珍獣ハンター・サトウといったところか。

1度、ザンビアに戻り今度はジンバブエの宿へ。ここでは世界三大瀑布のビクトリアの滝があり、ザンビア側の滝は勢いがなかったがジンバブエ側の滝は大迫力であった。ジンバブエの国境では民族のへんてこな踊りを見た後に珍品とも言える、クドゥ、インパラ、シマウマ、キリンの肉を食べる事が出来た。滝付近を散策しながら珍虫探しで草臥れた体力を回復しパワー全快になった。最後にナミビアのナミブ砂漠へ行こうと飛行機を予約していたが、ナミブ砂漠の最寄りの空港へのフライトは直前になってスケジュール変更となってしまう、自身の休みの都合や帰国のフライトの接続を慮って余儀なく首都の空港へ降り立った。ナミビアでは1泊して誕生日を迎えナミブ砂漠を見て帰国する予定だったが、首都ウィントフックでの植物園での珍虫ハントと土産購入をして短い滞在を終えた。土産屋では税関申告不要のスプリングボックとワイルドビーストの肉の缶詰を購入し、誕生日プレゼントとしてホテル空港間の送迎は無料となった。ザンビアから始まった夏休みは1週間だったが、珍虫採集、珍獣ウォッチング、珍肉イート、珍国ビジターとして一気に4ヶ国カウント出来てまずまずの思い出のある旅となった。

(日動協ホームページ、LABIO21カラーの資料の欄を参照)



ジンバブエ人のへんてこダンス



珍肉 クドゥ (左) インパラ (右)



珍肉 シマウマ (左) キリン (右)